

上方文藝研究

第20号

◇特集 正木ゆみさん追悼

- 花の雲—正木ゆみ先生との思い出など— …………… 有澤知世 (1)
- 旅の再生—秋成の俳諧紀行『去年の枝折』をめぐって …………… 飯倉洋一 (5)
- 木瀬三之筆『八雲神詠伝』 …………… 海野圭介 (13)
- (研究ノート)
- 『平家女護島』の典拠『源平盛衰記』に関する一、二の考察 …………… 川崎剛志 (21)
- 〔翻刻〕歌川国芳画『凡夫癖物語』 …………… 近衛典子 (26)
- 朝顔好みと朝顔嫌い—殿村平右衛門と大塩平八郎— …………… 福島理子 (38)
- 『心中宵庚申』と四天王寺 …………… 福田安典 (44)
- 近松浄瑠璃における「時雨」の用法
- 『冥途の飛脚』「新口村」の場に降る「横時雨」をめぐって— …… 細川久美子 (47)
- (研究ノート) 九華山地蔵寺蔵『地藏菩薩靈驗記』の位置 …………… 山崎 淳 (54)

◇自由投稿

- 恋する齋院—〈定家と式子〉古浄瑠璃『小倉山百人一首』を読む …… 天野聡一 (61)
- 岡田玉山の抄録絵本—『絵本太平広記』をめぐって— …………… 李 俊甫 (75)
- 荒木田麗女『藤の岩屋』『野中の清水』の位置づけ
- 『野中の清水』跋文の宣長の解釈を契機として— …………… 時田紗緒里 (86)
- 『月氷奇縁』論—冒頭の〈冤罪事件〉に注目して— …………… 池田真紀子 (95)
- 舟木杏庵『採蔘吟草』の紹介と翻刻 …………… 新稲法子 (111)
- 修竹庵桃原堯民について—契沖流を汲む堂上系地下和歌宗匠— …… 浅田 徹 (121)

◇連載 上方文藝への招待 (11)

- 日本のデジタル文学地図—名所・旧跡を軸に古典文学を逍遙する— …… 中尾 薫 (146)

上方文藝研究会

2023年6月

前号目次

◇小特集 赤木文庫特集

○赤木文庫・横山重を語る

横山重先生と赤木文庫…………… 阪口弘之

横山重先生の手紙(村岡先生宛)…………… 大橋正叔

伊豆高原にて

晩年の赤木文庫主人横山重翁…………… 廣瀬千紗子

追想 横山重先生―「小僧」の思い出―…………… 中嶋 隆

横山重と岡田利兵衛

―『とよみぐさ』をめぐって…………… 辻村尚子

横山重と時局―研究の政治性―…………… 藤巻和宏

【座談会】―誠堂書店主人、酒井健彦さんに聞く

―横山重氏の思い出

酒井健彦・瀨瀬くり・福田安典・近衛典子

○赤木文庫・小論文

小槻量実とその句集について

―横山重旧蔵連歌資料の一―…………… 小川剛生

『しのだづま』小考…………… 福田安典

赤木文庫蔵本「かいぢん八嶋」と

「凱陣八嶋」の世界…………… 金 智慧

浄瑠璃『定家』前後

―〈定家と式子〉道成寺物への変転…………… 天野聡一

田村丸物古浄瑠璃の構造と逆賊の造型

―『高丸悪路王責』『坂上田村丸誕生記』を中心に―

…………… 松波伸浩

山東京伝『桜姫全伝曙草紙』小考

―清閑寺の場面を中心に―…………… 有澤知世

赤木文庫蔵『阿弥陀胸割』の

柳亭種彦識語に関する一考察…………… 岡部祐佳

横山重氏旧蔵『祇園物語』…………… 速水香織

忍頂寺務旧蔵『自惚鏡』をめぐって…………… 西出春菜

◇自由投稿

契沖から舌耕へ―多田義俊の

『百人一首風耳抄』をめぐって―…………… 浅田 徹

『摂津名所図会』は何を描いたか…………… 山野邊美里

宮崎玉緒の伝記的研究…………… 飯倉洋一

江戸時代における漢詩の

失律に関する認識…………… 黄 鶯

◇連載 上方文藝への招待(10)

『悪狐三国伝』研究会について…………… 福田安典

舟木杏庵『採萁吟草』の紹介と翻刻

新 稲 法 子

はじめに

本稿は河内を代表する漢詩人北山橋庵の高弟、舟木杏庵の『採萁吟草』について、翻刻を付して紹介するものである。

一 津屋村の北山橋庵（一七三二—一七九二）は、名医として知られる一方で文雅に親しむ一面を持ち、混沌社とも交友のあった河内の代表的な漢詩人であるが、橋庵の最も優れた弟子が、舟木杏庵（一七六一—一七九四）である。

杏庵については、これまでほとんどわかっていなかった。辞典類の情報も、『大阪名家著述目録』に簡潔に記されている範囲を出ない。著書についても同様で、書名は伝わるが『国書総目録』にも所蔵先は記されていない。

ところが四年前、大阪関係の写本を十九冊一括で入手した中に、『大阪名家著述目録』に記されたものと推測される写本が含まれて

いた。これらの写本は従来の北山橋庵研究に資することが期待されるが、何よりも、河内における橋庵の次の世代の漢詩研究をするための基本的な史料になると考える。

今回はそのうち『採萁吟草』を翻刻し、紹介する。僅か十九首の小品であるが、これにより、舟木杏庵を中心とする北山橋庵の次の世代にあたる若い医師たちが、どのように漢詩を楽しみ、どのような作品を作っていたのか、河内の医師による漢詩サークルの様相が窺えるであろう。

舟木杏庵について

舟木杏庵の名が知られているのは、北山橋庵の詩集『橋庵詩鈔』の上梓に携わった人物としてである。『橋庵詩稿』には「門人」として「舟木璋伯裳輯、荒木俊元民校」と古市の荒木元民と共に杏庵の名が記されている。『大阪名家著述目録』（注1）の舟木杏庵の項目

には次のように記されている。

〔名〕信通〔字〕伯裳〔通称〕杏庵〔生〕宝曆十二年〔歿〕寛政六年六月廿九日

〔年〕三十三〔墓〕南河内郡東瓜破村墓地 東瓜破村の人、医を北山

元彰（注2）に学ぶ、元彰其才を愛し北山氏を称せしむ、其の術大に售る、兼て詩文を能くす、

北山橋庵行状 一

杏庵詩稿 一

採夷吟草 一

撰遊吟草 一

南遊紀行 一

『大阪名家著述目録』に「元彰其才を愛し北山氏を称せしむ」とあるように、『大阪府史蹟名勝天然記念物』（注3）では瓜破村大字東瓜破の杏庵の墓が「北山杏庵墓」として収録されている（注4）。

三味墓地の中央にあり。碑高さ二尺一寸五分、幅九寸八分、厚さ五寸七分、二段の台石の上に建つ。西面に「北岡杏庵墓」と刻し、碑側に左の文を刻す。

余以詩如文与北山元章相識、其門下可紹徽音者舟木伯裳其人也、元章臨没、命冒北山氏、蓋視猶子云、後二年伯裳亦没、寛政六年六月二十九日也、年三十三、葬于東郊先塋。伯裳諱信道、称杏庵、本姓源、為山縣氏、居於江州蒲生舟木村、因氏、曾祖某移居河州東瓜破村、業医、伯裳少孤、師学元章、祖業類其郷、有一男未亂山北元寧以準其家族、立碑請銘、銘

曰

若人世之所悼惜是以安其宅

篠心道撰 篠弼書

北山杏庵名は信道、字は伯裳、通称は杏庵、その先は江州蒲生郡舟木村の人、因りて舟木を氏となす。曾祖某に及び、河州東瓜破村に移り、医を業とす。杏庵少にして孤、北山元章に師事すること多年、元章その才を愛し、没するに臨み、北山氏冒さしむ。祖業を継ぎ、その術大に行はる、兼て詩文をよくし、北山橋庵行状、枯庵詩稿、採夷吟草、撰遊吟草、南遊紀行等の著あり。寛政六年六月二十九日歿す。年僅に三十有三。

碑文によると、橋庵の弟で北山家を継いだ北山元寧が、杏庵を家族に準ずる者として碑を建て、銘を篠崎三島に依頼したという。書は養子の篠崎小竹による。

『大阪名家著述目録』にない情報として、杏庵の先祖は江州蒲生郡舟木村の人だったこと、曾祖父の代になって河内の東瓜破村に移り、以来医を業としたこと、父親を早くに亡くしていること、「有一男未亂」とあつて杏庵もまた、まだ齒も生え替わっていない幼い子供を遺して亡くなったことがわかる。

また、碑文からは橋庵が杏庵を自らの後継者として扱っていたこともわかる。

『杏庵詩稿』所収の「奉哭橋庵先生三首 橋庵先生を哭し奉る三首」と題する古詩の其の三に

想像十年餘 想像す十年余

愛遇如子姪 愛遇子姪の如し

とあり、「橘庵先生大祥忌賦一詩奉薦」(橘庵先生大祥忌一詩を賦して薦め奉る)にも

恩遇固猶子 恩遇固に猶ほ子のごとし
依依在目前 依依として目前に在り

とあるように、杏庵は橘庵とは親子のような関係であつたという。

これは単なる詩的な修辭や杏庵の一方的な思い入れではない。碑文に「元章没するに臨んで命じて北山氏を冒せしむ、蓋し視ること猶ほ子のごとしと云ふ」と顔淵の葬儀にあつたの孔子の言葉を用いて表現(論語 先進第十一)したように、友人三島の目から見ても、橘庵にとって杏庵は我が子のような特別な弟子だったのである。早くに父を亡くした杏庵と、子のない橘庵の結びつきは強いものだったのである。

橘庵が杏庵に北山氏を称することを許したのは、単に学成つた弟子に対する行為ではなく、死に際に後継者を決めておきたいという切実な事情によるものだったことが窺える。

この他、杏庵の伝記的な情報に補足すると、寛政二年版の『浪華郷友録』(注5)「医家」の「附録」に

舟木璋 字伯裳 瓜わり村 舟木敬二

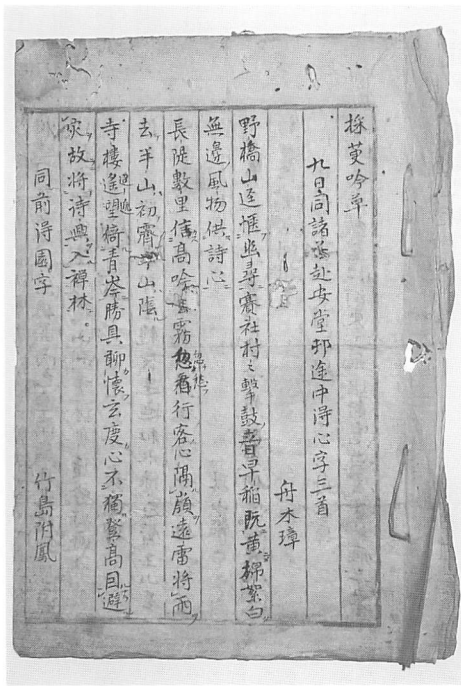
とある。『大阪名家著述目録』には通称杏庵とあるが、通称は敬二、

号が杏庵とすべきだろう。

『採莢吟草』について

『大阪名家著述目録』などによると、杏庵の著作として北山橘庵行状、杏庵詩稿、採莢吟草、撰遊吟草、南遊紀行が挙げられている。入手した写本で舟木杏庵の筆跡と推測できるものは(注6)杏庵詩稿、採莢吟草が各一冊、南遊紀事が二冊、題名が記されていない詩稿二種である。このうち書名も一致する杏庵詩稿と採莢吟草は、おそらく『大阪名家著述目録』に記されたものだと考えられる。

『採莢吟草』写本一冊は、書名の「採莢」つまり菜莢を採るという語が示すように、舟木杏庵らが重陽の節句に集って詠んだ詩を集めたものである。表紙はなく、紙縫り綴じで、「採莢吟草」は首題。



(図1)

二四・四×一七・二センチメートル、行数一〇行、紙数三丁。末尾に識語があり、署名は「蘭庵」とあるが、どのような人物なのかは未詳。推敲の書き入れあり、同筆で墨と朱の両方を用いる。三丁裏に貼り紙があり、七言律詩一首が記されているが、上部は破損している。全体に虫損が甚だしい(図一)。

識語には「伯裳希亮及桑竹二子同大日寺諸集」(伯裳、希亮、及び桑竹二子同じく大日寺に諸集す)とある。

この重陽の行楽が何時のことなのか、年時を示す言葉はない。杏庵が寛政六年に亡くなっているものでそれ以前であることはたしかである。医師ではなく、まだ少年の篠崎小竹が参加していることが注目されるが、もし橘庵と親しい篠崎三島繁がりだとすれば、小竹が三島の養子になった十三歳、寛政五年より後かもしれない。早世した杏庵の晩年のことである。

参加者であるが、『採夷吟草』における表記では、舟木璋、竹島附鳳、桑野璋、北山懿、篠弼、篠惟馨、釋真龍の七名である。舟木璋はもちろん杏庵。竹島附鳳は丹北郡川辺村の竹島浩庵。桑野璋は志紀郡大田村の桑野喜庵。北山懿は北山元恭(赤城、橘庵の弟の元寧(業庵)の子。すべて医師である。篠弼は篠崎小竹。篠惟馨は平野含翠堂の篠原良斎、『杏庵詩稿』には含翠堂で詠んだ詩が収められているので、その繋がりであろう。釋真龍は大日寺の僧侶であろう。識語はこれと一致しないが、伯裳は杏庵、希亮は含翠堂の篠原希亮だとして、桑は桑野喜庵、竹は篠崎小竹か。

作品数は杏庵が七絶三首、七律二首。竹島浩庵が五律一首、七律一首。桑野喜庵が五律三首、七絶一首。北山元恭が七絶二首。篠崎小竹が七律二首。篠原良斎が七絶一首。釋真龍が七律一首。作者不

明の七律一首。計十八首であるが、桑野喜庵の「同前得秋字三首」に「脱一首」とあるので本来は計十九首であった。

次に杏庵らが登高のため目指した大日寺であるが、大県郡安堂村、現在の柏原市安堂町にある。『河内名所図会』六卷「大日寺」(注7)には次のように記載されている。

安堂村にあり。曹洞宗永照寺と号す。大平村の智識寺の一院なり。中興万耕和尚、享保十一年の再興なり。

本尊大日如来 長二尺五寸当寺の本願は大坂高麗橋西村氏なり

河内吟行について

北山橘庵は大坂の混沌社の人々をしばしば招き、屋敷は混沌社の支社の様相を呈していた。『橘庵詩鈔』(注8)には「余養痾於浪華僑居舟伯裳來訪有詩次韻」(余、痾を浪華の僑居に養ふ。舟伯裳來訪し詩有り、次韻す)などの作があり、北山家の別宅が大坂にあったことがわかる。医者としての橘庵が地域の人々のために精力的に活動していたことは残された医学関係の史料から窺えるが、文雅の面を『橘庵詩鈔』などから見てみると、橘庵が交遊したのはもっぱら大坂を中心とする他郷の人々だった。

しかし、橘庵の弟子の世代になると、河内の医師たちは自分たちだけで連れだつて地元を吟行するようになった。山中浩之氏は八尾東郷村の医師、田中元緝に関する論考において、混沌社との繋がりを踏まえた上で、地元の人々との交流が形成されていることに注目している。

むしろ大事なことは、こういう来訪を契機に、在地の好字の人々が会する場をもち、その人々の間に同志的な意識や交流が新たに形成されてきたとみられることである。元緝の書き残した「河南遊行記」(仮題)一篇はそういう意味で注意される。それは二洲来訪直後の寛政元年(一七八九)三月晦、元緝と舟木伯裳^{はくしやう}・安田駿仲(春益)が、平野含翠堂の篠原良斎の下に会し、「浴沂の楽」(同志と共に郊外に遊ぶ楽)をなさうということになり、四月十日富田林をめざして行なった紀行である。(注9)

この交流について、田中祐尾氏も

漢詩吟行の村医者たちのネットワークもあった。久宝寺村安田春益・大田村桑野喜庵・瓜破村舟木杏庵・川辺村竹島浩庵といった概ね三十歳代の在郷医の面々で寛政元年の詩集には田中元緝二十三歳の記載あり。(注10)

と河内の医者たちが漢詩を媒介にして繋がっていたことについて触れている。

卑近な表現をすれば、現在の職業人が余暇にゴルフや麻雀などの趣味で親睦を深めるように、医師たちで集って楽しむものが漢詩だったのである。

『採夷吟草』もこういった吟行の一つの記録であろう。桑野喜庵は13「同前得秋字」(同前、秋字を得たり)で

此地曾經過 此の地皆て經過す

佳辰又上樓 佳辰又樓に上る

と詠んでいることから、こういった吟行がしばしば行われていたことが窺える。

ここで注目したいのは、山中浩之氏が述べているように、寛政元年の吟行を主導したのが含翠堂の篠原良斎ということである。『杏庵詩稿』を繙くと、杏庵は含翠堂の詩会に参加していたことがわかる。

秋晚含翠堂集同浪華諸子賦分韻八齊

秋晚含翠堂に集ひて浪華の諸子と同じく賦して韻を分かつ、八齊。

尋盟驛社此相攜 盟を尋ねて驛社此に相携ふ

不管郊村秋暮凄 管せず郊村秋暮の凄を

儒服道冠人八九 儒服道冠人八九

攝陽河内路東西 攝陽河内路東西

占冬氣候爐初擁 冬を占むる氣候爐初めて擁し

垂夜吟哦句屢迷 夜に垂る吟哦句屢しば迷ふ

傾蓋且忘新故意 傾蓋且く新故の意を忘れ

堂上團欒穩坐齊 堂上團欒穩坐齊し

「儒服道冠人八九 攝陽河内路東西」という韻聯は、攝陽つまり大坂と河内とを結ぶ奈良街道に面している含翠堂に、様々な人が集まっていたことを表している。

『西鶴諸国はなし』巻二ノ四「残る物とて金の鍋」には河内から平野の里へと帰りを急ぐ「木綿買い」が登場する（注11）。宝暦十三年の「撰州平野大絵図」に産物として「繰綿 撰河泉の綿を繰出し諸国に商ふ」とあるように（注12）、平野郷は周辺の農村の綿花を加工し、大坂から諸国に売りさばくことで富を成した。『平野郷町誌』には宝暦年間から寛政年間にかけての綿問屋の盛衰や、天保五年に平野郷綿市場が免許されたことが記されている（注13）。『採萸吟草』が成立したのは、平野郷の繰綿に携わる町人が、『西鶴諸国はなし』に登場する木綿買いのように河内と平野を行き来していた時期であった。

この土地柄が、河内で吟行をするという思いつきを生み出したのであろう。しばしば行き来して目にしていなければ、これまで詩歌の舞台になつていなかった地域で吟行をしようとは思わない。一方で、その地域の住民は生活の場が吟行にふさわしい趣を備えていることに気付きにくい。

そして河内の医師たちの吟行に平野郷の篠原良斎を招いたのは、含翠堂の詩会に参加していた杏庵ではないだろうか。『杏庵詩稿』に収められた含翠堂での詩は分韻の形で詠まれており、『採萸吟草』もまた分韻である。良斎と杏庵が中心となつて吟行の詩会を世話したとすれば、作品をまとめた『採萸吟草』が杏庵の著作として伝えられていることも辻褃が合う。

『採萸吟草』は杏庵の1「九日同諸子赴安堂邨途中得心字」（九日諸子と同じく安堂村に赴き途中心字を得たり）と題する「心」の韻の詩で始まる。

野橋山逕 幽尋 野橋山逕 幽尋に愜ふ
賽社村村 撃鼓音 賽社村村 鼓を撃つ音
早稻既黄 棉絮白 早稻は既に黄にして棉絮は白く
無邊風物 供詩心 無辺の風物 詩心に供す

河内の風景が詩心に響くことを述べていて冒頭の詩にふさわしい。秋祭りが近いのか太鼓の音も聞こえてくる、長閑で平和な田舎の描写だが、豊かな秋の実りを稲だけでなく綿の実で表現しているのが、いかにも河内の風景である。

この詩の「心」の後、浩庵らの「園」「長」「翁」の韻を用いた詩が続く。韻字はなんらかの詩句を分解したものかもしれない。

次にまた杏庵が7「登大日寺樓分得江字」（大日寺の樓に登り分ちて江字を得たり）という新しい題の詩を「江」の韻で詠み、「徒」「飛」「回」「辺」「秋」「年」の韻の詩が続く。北山元恭の作を挙げよう。

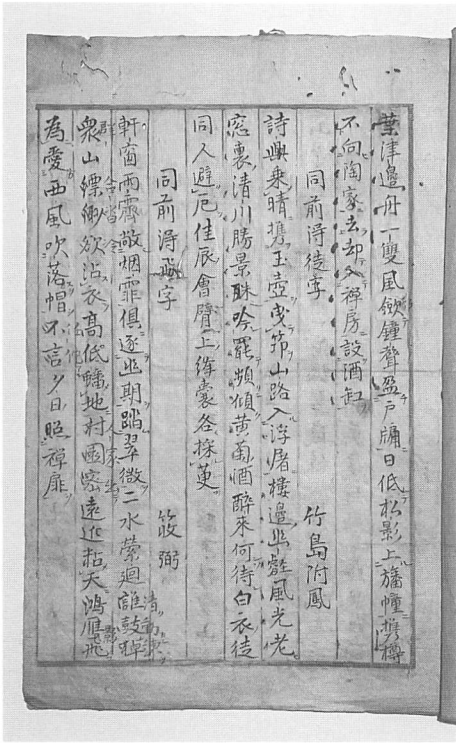
茱萸插得 幾人來 茱萸挿し得て幾人か來たる
避灾同登 大日臺 災を避けて同じく登る大日台
秋色平臨 黄樹杪 秋色 平臨す黄樹の杪
和川如練 向西回 和川練の如く西に向いて回る

赤いグミの実を身に着けて高い所に登るといふ重陽の日の風習を大日台、和川と実際の固有名詞を織り込みながら詠んでいる。大日寺の高樓から望む秋の景色、黄樹は銀杏であろうか。大和川も一筋の練り絹のように流れている。この表現は実景で、安堂村の西に大和川が流れているが、小竹が「二水」という言葉を用いたように石

川が大和川と合流する地点でもある。

目的地までの移動中に一度、宴席で改めてもう一度韻を分かつという段取りで、後者は宴席で時間があるからか全員が詠んでいる。杏庵は篠崎小竹の作のみ朱で添削をしているが、自分より十九歳若い小竹に詩の手ほどきをしたのであろう(図2)。復路で小竹が「帰途口占示諸友」(帰途口占諸友に示す)と即興の口ずさみを詠み、杏庵と喜庵が続くのも微笑ましい。

『採萸吟草』の作品は、茱萸、菊、吹帽など重陽の詩の定番の詩語を用いる一方で、大和川を表す「和川」「和水」という語も用いて実景を描写している。吟行という試みによって身近な風景に詩情を見いだした結果、北山橋庵の次の世代の舟木杏庵らの医師たちは、河内の地で漢詩を楽しむことができるようになったのである。



(図2)

【翻刻】

通し番号を付けた。

いわゆる康熙字典体を用い、一行に二句ずつ配置した。

「々」は用いず、二元の字に直した。

添え仮名はすべて片仮名で表記した。

朱筆はゴチック体で示した。

採萸吟草

1 九日同諸子赴安堂郵途中得心字三首 舟木璋

野橋山逕愜幽尋 賽社村撃鼓音

早稻既黄 棉絮白 無邊風物供詩心

2 忽愁 雲霧忽看行客心

長隄數里信高吟 半山初霽半山陰

隔嶺遠雷將雨去 雲霧忽看行客心

3 迢遞 勝具聊懷玄度心

寺樓遙望倚青岑 故將詩興入禪林

不獨登高因避災 故將詩興入禪林

4 同前得園字 竹島附鳳

相逢同社友 緩步出村園

雨・色連^ニ南嶺^ニ
日光晴^ル北原^一
芒鞋閑^ニ傍^レ水^ニ
騷^一客遠^ク携^レ杖^ヲ
山^一刹重陽^ノ會
清吟好^シ避^レ喧^ヲ

5 同前得長字 桑野璋

佳節携^ヘ騷客^ヲ 東郊望轉^タ長^シ
透^一迤和水綠^リニ 蕪^一鬱玉山蒼^シ
吟^一杖移^シ風景^ニ 狂^一歌弄^ス霽光^ヲ
翠^一微尋^ニ古寺^ヲ 禮^一佛入^ニ禪堂^ニ

6 同前得翁字 北山懿

十里^ノ長隄路向^レ東^ニ 秋深^ケ黃葉舞^フ清風^ニ
何^レ邊^カ吟杖尋^ニ幽約^一 迷津^一口迷^フ時間^ニ村翁^ニ
老^一

7 登大日寺樓分得江字 舟木璋

樓脚高^ク抽^シ枕^ニ碧江^ニ 河東^ノ山水迫^ル軒窗^ニ
白雲峰^一外雁^ニ三五 黃葉津^一邊舟^一雙
風斂^テ鐘聲盈^ニ戶牖^ニ 日低^レ松影上^ル幡幢^ニ
携^レ樽不^ト向^ニ陶家^ニ去^上 却^テ入^ニ禪房^ニ設^ク酒缸^ヲ

8 同前得徒字 竹島附鳳

詩^一興乘^レ晴^ニ携^フ玉壺^ヲ 曳^レ筇^ヲ山路入^ル浮屠^ニ
樓邊^ノ幽^一壑風光老^レ 窻裏^ノ清^一川勝景殊^{ナリ}

吟^シ罷^テ頻^リ傾^ク黃菊^ノ酒 醉^一來何^シ待^シ白衣^ノ徒
同人避^ク厄^ヲ佳辰^ノ會 臂上^ノ縫囊各^オ採^レ莢^ヲ

9 同前得飛字 篠弼

軒^一窻雨^一霽敵^ニ烟^一霏^一 俱^ニ逐^テ幽期^ニ踏^ム翠微^ヲ
清^ク動^レ練^ヲ 群^一合沓^冷
二水縈^レ廻誰鼓棹 衆山縹渺欲沾^ス衣^ヲ
高低蟠^シ地^ニ村園密 遠^一近粘^シ天鴻雁飛
人家出^テ 任^一佗^ア

10 同前得回字 北山懿

爲^レ愛^ル西^一風吹^一落^ス帽^ヲ 不言^夕日^ノ照^ル禪扉^ヲ
茱萸插^ミ得^テ幾人^カ來^ル 避^レ灾^ヲ同^ク登^ル大^一日^一臺
秋色平^一臨^ス黃樹^ノ杪 和^一川如^レ練^ノ向^レ西^一回^ル

11 同前得邊字 篠惟馨

紺^一宇高^ク澗^ル和水^ノ邊 黃花滿^一酌^此陶然^然
醉來殊^ニ愛^ス山山^ノ色 楓^一葉飽^テ霜蜀^一錦鮮^{ナリ}
脫^一一首 桑野璋

12 同前得秋字三首 脫一首 桑野璋

山寺登^レ臨好^シ 携^テ樽^ヲ倚^ル樓^ニ
翠風侵^レ坐^ヲ淨^ク 黃^一樹傍^レ窻^ニ幽
殘雨千家^ノ夕 寒燈萬壑^ノ秋
茱萸乘^レ醉採^ル 日暮且^ツ遲留^ス

13 二

此地會テ經過ス 佳辰又上ル樓ニ

群山饒ク勝景一 諸客足ニ風流

遠一樹川新ニ露レ 孤一村雨半ハ收ル

平一臨ス河攝ノ地 端一坐 望望對ニ清秋一ニ

14 同前得年字 釋眞龍

吟侶相携テ重九ノ天 共ニ敲ク禪宇ヲ翠微ノ邊

霜乾テ纈一纈楓林灼ニ 雨霽レテ紅一黃菊塢鮮ナリ

結フ社ヲ僧ハ容シ驛客ノ酒ヲ 尋ル盟ヲ人ハ想フ孟嘉カ賢ヲ

留一連終一此ニ凭ル檻ニ 可レ惜佳辰又隔ルヲ年ヲ

15 歸途口占示諸友 篠卿

山蹊燕尾路初テ分ル 十里ノ長隄歩ニ夕曛ニ

敗一柳將レ黄ラント 墜テ隨ヒ水ニ 炊烟漸ク白シテ遠シテ爲ル雲ト

聯スル詩杖ハ逐ヒ樵漁ノ跡ヲ 争フ渡ヲ人ハ如シ麋鹿ノ群ニ

投シテ困ヲ旗亭餘一興在リ 敲推不レ厭ハハ醉醺一醺

16 同前 舟木璋

山樓終日作清歡 歸路蕭然回首看 頭不耐

纔盡重陽吹帽興 初知九月授衣寒

江村風後茅茨廢 野水秋闌荻葦殘

多少同遊人悉散 已 斷鳴遙叫 哀鳴斷雁暮雲端

17 同前 桑野璋

一逕繁一紆挂ニ薜蘿ヲ 斜陽出テ寺ヲ飽ク吟哦ニ

相携テ未タ 見松一間ノ月 醉一後下レハ山ヲ餘一興多シ

是之採與吟草伯裳希亮及桑竹二子同大日寺諸集伯前日余曰 正

明九日大日寺登亭發詩席移余云余同出登大日寺樓席上諸友作也 蘭庵題

18 (別紙)

□樓ヲ西一日没ニ寒陂ニ 荒一逕酒醒テ吟歩遲シ

已ニ盡ス重陽吹一帽ノ興 □ル九月授一衣ノ時

山一村風一後茅一茨廢シ 野一水秋闌一蘭芷衰フ

□到レハ半途人漸ク散シ 微一茫タル烟樹鳥迷フ枝ニ

注

(1) 『大阪名家著述目録』大阪府立図書館、一九一四年。

(2) 「元彰」は橘庵の字。

(3) 『大阪府史蹟名勝天然記念物』第3冊 中河内郡、大阪府学務部、一九二八年。

(4) 北山杏庵墓のあった「瓜破村大字東瓜破」一帯は昭和十五年に大阪市設の瓜破靈園として整備された。二十八万平方メートルの広大な靈園ということもあって未だ見つけられず、墓が現存するかどうかは不明である。

- (5) 『浪華郷友録』寛政二年版。森銃三、中島理寿編『近世人名録集成』第一巻地域編Ⅰ、勉誠社、一九七六年、所収。
- (6) 北山家所蔵史料を調査の折、杏庵の手によるものも実見して判断した。
- (7) 『河内名所図会』国立国会図書館デジタルコレクションによる。
- (8) 『橋庵詩鈔』国文学研究資料館の画像データによる。
- (9) 山中浩之「在村医家の形成と儒教——八尾田中元緝を中心に——」、井上薫編『大阪の歴史と文化』和泉書院、一九九四年、所収。
- (10) 田中祐尾「江戸期河内地方の儒医たちその日常生活について」、『日本医史学雑誌』第63巻第2号、一般口演、二〇一七年。
- (11) 『新日本古典文学大系76好色二代男 西鶴諸国はなし本朝二十不孝』富士昭雄、井上敏幸、佐竹昭広校注、一九九一年。
- (12) 国際日本文化研究センター所蔵地図データベースによる。
- (13) 『平野郷町誌』平野郷公益会、一九二二年。

〔附記〕

本研究は科研費基盤研究(C) 21K00317の助成を受けたものです。

(いいな のりこ／佛教大学非常勤講師)

編集後記

- 『上方文藝研究』第20号をお届けします。本号では創立よりのメンバーで、あまりにも若くご逝去された正木ゆみさんを追悼する特輯を組みました。
- 正木さんの追悼原稿には、想い出を語りながらの研究ノート、本格的な論文、資料翻刻が九本並びました。各自の正木さんへの悼みの形であろうかと思えます。正木さんのご霊前へ捧げます。
- 自由投稿論文では、古浄瑠璃『小倉山百人一首』を扱った天野論文、『絵本太平広記』を扱った李論文、荒木田麗女『藤の岩屋』『野中の清水』を扱った時田論文、『月水奇縁』を扱った池田論文、舟木杏庵『採夷吟草』の紹介と翻刻の新稿論文、修竹庵桃原克民を扱った浅田論文がいずれも査読を経て掲載されました。
- 十一回目となる「上方文藝への招待」は、日本のデジタル文学地図をテーマとして中尾薫氏より寄稿いただきました。
- 前号の赤木文庫特集につきまして、横山重先生の住居と没年についての記載について、執筆者の記憶違いなどにより、事実と一部異なる記述がありましたこととお詫びします。
- 今号より事務局が神戸大学に変わります。雑誌を牽引されてきた飯倉先生には今後も顧問として引き続きご指導をお願いすることとなります。新事務局の有澤先生にみなさまのご協力をお願いします。
- 次号も充実した内容とすべく、奮って御論文を御投稿くださいませ。上方に関する資料紹介も大歓迎です。(福田)
- 二〇二二年四月より事務局を移転いたしました。住所等は奥付をご参照ください。お問い合わせ等はメールにて承ります。
- 『上方文藝研究』の購読会員・執筆会員(同人)に入会をご希望の方は、事務局までメールでお申し込み(お問い合わせ)ください。購読会員の年会費は千円です。年一回刊行の本誌一部(送料は当会負担)をお送りいたします。執筆会員は年会費六千円(学生は二千円)で、本誌二部を配布します。
- なお、執筆される場合、査読により原稿の採否を決定します。詳細は下記連絡先までお気軽にお問い合わせください。
- 住所・所属・メールアドレス等に変更が生じた際は、下記事務局アドレスまで速やかに御連絡をいただければ幸いです。また、当会では執筆・学生会員のみならず積極的な投稿をお待ちしております。少しでも上方に関わりのありそうな内容であれば構いませんので、是非お気軽にご相談ください。なお、投稿の際には書式・締め切りを遵守いただきますようお願い申し上げます。事務局の負担軽減のため、ご理解を賜れば幸いです(有澤)

『上方文藝研究』第20号編集部

有澤知世／飯倉洋一／岡部祐佳／福田安典(五十音順)

上方文藝研究の会 同人(五十音順)

浅田 徹	天野 聡一	有澤 知世	飯倉 洋一	池田真紀子	一戸 渉
一九奈央佳	稲本 紀佳	内田 宗一	海野 圭介	袁 葉	大橋 正叔
岡島 昭浩	岡部 祐佳	尾崎 千佳	加藤 のん	加藤 弓枝	神谷 勝広
川崎佐知子	川崎 剛志	川端 咲子	神作 研一	康 盛国	木越 俊介
木田 則子	衣笠 泉	智恵 黄	鷺 合山林太郎	近衛 典子	
小松 拓矢	鈴木加成太	勢田 道生	高松 亮太	辻村 尚子	時出紗緒里
仲 沙織	中條あさ子	永野 仁	新稲 法子	西出 春菜	野澤 真樹
橋本 孝成	バシーフキナ・ソフィア	服部 仁	浜田 泰彦	樋口 純子	
深沢 真二	深沢 了子	福島 理子	福田 安典	藤野 育	細川久美子
松原 秀江	丸井 貴史	宮川 真弥	盛田 帝子	山崎 淳	山田 昇平
山本 和明	山本 嘉孝	米谷 隆史	李 俊甫	笈田 将樹	鷲原 知良

上方文藝研究 第二十号

令和五(二〇二三)年六月二日 印刷
令和五(二〇二三)年六月二七日 発行

編集・発行 上方文藝研究の会

〒六五七-八五〇一 兵庫県神戸市灘区六甲台町一-二

神戸大学人文学研究科有澤研究室内

Tel. 〇七八-八〇三-五五四〇

kambunken@gmail.com

郵便振替 〇〇九二〇-四一三〇四一〇(上方文藝研究の会)

印刷 株式会社 ケーエスアイ